Osaka Shoin Women's University Repository

# 語彙と表現との間

原田芳起

## 一　方弘はいみじう人に笑はるる者かな

勿論『枕草子』の中の一段で、日本古典全書では百四段、日本古典文学大系では一〇八段、いずれも三巻本系の伝本によっている。日本古典文学全集では一一三段、こちらは伝能因本系の本文を用いている。初めて『枕草子』を読んでみようとする学生諸子に取っては、三巻本対伝能因本の本文の相異点をどう考えて行ったらよいか、かなりまぎらわしくもあり、つきつめて考えるとなると、すこぶる困難な問題をかかえている。右の「方弘は云云」の章などもそうである。

三巻本が可か、伝能因本が可かについては、『枕草子』を深く専攻された先生方の説が鋭く対立して、われわれにはとても断定的な考えに到達し得ない。おおまかに言って三巻本の方が了解し易い章段が多いとは私なども感じて来たが、伝能因本の本文によらないと納得しにくい語彙・語形に出会う場合もある。このように全く系統を異にする本文の場合は、異文の生じ方という条件もさまざまであろうと思う。何らかの要請によって本文に改作・改変を生じる場合は、いずれを正、いずれを誤とも定められるものではない。どちらかが誤写によって異なる形を生ずる場合は、その生じ得る可能性が、双方のいずれにもあり得ると思われる。こんな、いささかまわりくどい論議は、この稿ではなるべく避けるつもりであるが、語彙と表現とのかかわりを考えるには避けて通れない場合もある。

三巻本を底本とした古典全書によると、この章段の冒頭の一文は方弘はいみじう人に笑はるる者かな。親などいかに聞くらむ。供にありく者のいと美美しきを呼びよせて、人人「何しにかかる者には使はるるぞ。いかがおぼゆる」など笑ふ。（二一七頁）とある。この中の「美美しき」云云の頭注には〈「華美な風をしてゐる者を呼び寄せて。「美美しき」は底本「ひさしき」〉とあるが、『校本枕草子』上巻三四一頁の校異を見ると、右の底本たる陽明文

Osaka Shoin Women's University Repository

庫本の「ひさしき」と内閣本文庫本「ひと〳〵しき」だけが例外的で、他の三巻本系諸本は「ひゝしき」とあることが知られる。「ひゝしき」は「びびしき」と濁音に読まるべきことは、まず論のない所である。ただ、漢字「美」を根とした語であるかどうかについては、私は平安朝の用例から推して、否定的な見解を持っている。これについては、「平安文学研究」第二十四輯（昭35・3）に発表した拙稿「平安文学における漢語彙研究の課題」の中で論じたのが最初で、後『平安時代文学語彙の研究』六三七頁以下で同様の趣旨を繰返した。現在の辞書類は悉く「美々し」と解して、「はなやかである」「ばでである」という語義を与えているが、私の調べて見た七例程の表現と「はなやか」とではあまりにかけ離れている。「美々し」は『源氏物語孟津抄』が「美か」と注した以来踏襲しているに過ぎない。私としては、『源氏物語』の「行幸」の巻の一例、『蜻蛉日記』下巻の一例などの表現から推して、「びびし」の語義を、和語では「つきづきし」に近く、漢語系では「便なし」の反対語であると位置づけて、結局「便々し」であろうと推論したのである。

それでは右の「方弘は」段の、方弘の供をしているおのこが「いとびびしき」と人々に見られたのはどういうことか。「美々し」で解釈すると、どうしても服装などが華美であるとせざるを得なくなる。それではどうもしっくり来ない。諸家の御説に従って考えると、この文に現われて来る事件当時の源方弘は文章生から蔵人に任ぜられた前後であり、その後の彼の昇進の経歴から推すと、かなり有能な青年官吏であったのではないかと思う。その若い彼の供人を勤めているのも、おそらく年若い下衆のおのこであろう。それがそのおのことしては、ちゃんとした、難のない態度であり、所作進退も、容姿も、一応りっぱであったのであろう。それが人々の、特に女房連の眼に「びびしき」と印象されたというように解釈してみたい。つまり「つきづきし」「便なからず」が、この語の成立した平安朝当時の「びびし」の語義であったと考えるのである。

ある語の語義は、表現例から帰納する以外に確実な方法はあるまい。「びびし」という形から「美か」と主観的に推定し、「たいだいし」を「怠々し」「退々し」と短絡的に漢字を宛てて解釈しようとしがちであった中世注釈家の方法は、厳密な再吟味の要がある。

さて、三巻本系の「方弘は」段の「供にありくものどもの、びびしきを呼びよせて」というくだりは、右に述べたように、十分納得出来るものであり、本文に不審な所はない。だが、同じ三巻本系の中で、内閣文庫蔵本のように「ひと〳〵しき」とあるもの、陽明文庫蔵本のように「ひさしき」とあるものがまじっていることも、問題であるにはちがいない。この「ひと〳〵しき」は、伝能因本系の本文から影響を受けたものであろう。『源氏物語』の伝本の中でも、全体としては青表紙本系であるのに、所々の語句に河内本系の本文を影響的な関係で取り入れたと思われる一致が少なくない。それと同じように見なしてよかろうかと思う。「ひさしき」は誤写であることは明らかであるが、字形から考えると、この「ひと〳〵しき」からの写しひがめであろうと思われる。「ひゝしき」からではこの誤写は、多分生じないであろう。

Osaka Shoin Women's University Repository

ところで、右の三巻本系の本文に対し、伝能因本系のそれは、

まさひろはいみしく人にわらはるゝ物、をやいかにきくらん。ともにありく物とも人〳〵しきをよひよせて、「なにしにかゝる物にはつかはるゝそ、いかゝおほゆる」なとわらふ。

「わらはるゝ物」の下に「かな」があり、「をやいかに」が「おやなどいかに」とある慶安刊本があるが、これはあるいは三巻本系の影響による修正が加わっていよう。問題は申すまでもなく、

人〳〵しきをよひよせて

の所である。意味はよくわかる。「ひとびとしき」とは、人並みである、普通の人と比べて劣る所がない、という意味であるから、この語がここに用いられて当然であると思われる。人中に出て恥ずかしくない状態を表わすもので、『枕草子』の「虫は」段の例は擬人法で、蠅について「ひとびとしう、かたきなどにすべきものの大きさにあらねど」とあるのは、人ならば、身の程とか身分とかを評していることになる。『源氏物語』『宇津保物語』の用例は、官位や社会的地位が人に恥じない程にりっぱだという意味になっていることが多い。とすると、「方弘は」段の「ひとびとしき」は他の物語の類に見えるのとは、いささか色あいを異にする。その容姿や所作が人の中に出しても恥ずかしくない程度にりっぱであるというのであろうが、軽輩の方弘の、そのまた供人に対して「ひとびとし」とは、いささか異色の表現と認めざるを得ない。しかも副詞「いと」を冠して「いとひとびとしき」としたのは、個人的文体のかかわりを考えてもやはり多少の抵抗は感じる。次に引く『宇津保』の「菊の宴」の藤英の慷慨して言う詞、

恥を捨て名を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え知られしかばこそ、いささか浮かみ、ひとびとしくもなれ。そは、一つは天道、一つは学生の力なり。

などに見られる表現、あるいは『源氏物語』の「胡蝶」の巻の、源氏が玉鬘の姫君の身の上に対する配慮を示す。

まだ若々しう何となき程に、ここら年経給へる御中にさし出で給はむことはいかがと、思ひめぐらし侍る。なほ、世の人のあめるかたに定まりてこそは、ひとびとしう、さるべきついでもものし給はめと思ふを云云。

という表現などと並べて見ると、方弘の供をする下衆のおのこに「ひとびとしき」という評語は、必ずしも動かぬ表現とは言えないような気がする。

そこに対立する異文「びびしき」が出て来る可能性があったろう。語義は同じでないが、「りっぱだ」という表現的意味は、「ひとびとし」からも「びびし」からも汲み取れるのである。表現の色あいは、勿論かなりに異なる。いずれかといえば、「びびし」の方が軽い。身分とか官位とかが恥ずかしくない程度によくなったさまを「びびし」と評することはない。もっと軽い事がらについて、軽い語気で、「よき程である」とか、「程よい」とか批評している場合が多い。『蜻蛉日記』下巻の、兼家のふみ、

八月待つ程は、そこにびびしうもてなし給ふとか世にいふめる。

という表現例も、道綱母が婚女に求婚する右馬頭遠度（兼家の弟）では、四位五位六位の中ですこし人々しい者だけが集まったという

Osaka Shoin Women's University Repository

を考えてもやはり多少の抵抗は感じる。次に引く『宇津保』の一節

という表現例も、道綱母が養女に求婚する右馬頭遠度（兼家の弟）を程よくあしらっているという意味らしく、からかいと取れる。

「方弘は」段の表現も、「いとびびしき」ならば方弘の供のおのこが、その程度の身分の者としてはなかなかりっぱである、難点がないという批評と解される。

供にありくものいとひとびとしきを

供にありくものいとびびしきを

と並べて見ると、強いていずれかが誤りとも断じがたい。文章の推敲か、または修正かによって生じた、対立した異文であると考えたくなる。先後も断定しがたいが、文章表現としては、やや後者の方が落ち着いて来ているかに、私は感じるのである。

従って、三巻本を本文に立てて読む場合には、右のくだりは「びびしきを」に従うべきで、「ひとびとしきを」に置き換えるのは妥当でないと思う。能因本を立てる立場では、勿論「ひとびとしきを」に従って解読すべきであるが、私の感じから敢えて言うならば、この場面では、「いとひとびとしきを」では表現がいささか仰々しすぎる。「ひとびとし」は、ただ「人並みだ」という表現に用いた例はほとんど見当たらず、かなりに位階も高くなり、人に重んぜられるようになったさまを表現している例が多いからで、文章生出身の若い六位の蔵人のそのまた供をしてあるく下衆おのこを評するには、いかにも重々しすぎる。『枕草子』の用例にしても、

頭の中将のとのゐ所に、すこしひとびとしき限り、六位まで集まりて、（頭の中将の）

では、四位五位六位の中ですこし人々しい者だけが集まったというのである。

「方弘は」段は、このあともいろいろと解釈に問題のある箇所の多い一段である。能因本と三巻本との対立する異文がからんで、われわれを去就の判断に苦しませる。右の一節に続いて、

ものいとよくするあたりにて、下襲（したがさね）の色、袍（うへのきぬ）なども、人よりもよくて着たるをば（三巻本・古典全書による）

とあるまでは、てにをはの違い程度で、問題にする程の対立はないが、そのあとの一節が厄介である。

紙燭さしつけ焼き、あるは、人々「これをこと人に着せばや」などいふに。げにまた詞（ことば）づかひなどあやしき。（同上）

古典全書の校注では「などいふに」で句とし、ここで文が切れるとされる。同じ三巻本を立てた古典文学大系では「などいふに」で読点として下文に続けられる。全書では「これをこと人に着せばや」の上に「人々」と注記を入れているから、その上の「あるは」は接続詞と見ないで、「ある人々は」の意をなすと見られたことになろう。

「紙燭さしつけ（て）焼き、あるは…」という続けかたで、「あるは」をそのように取ることは無理であろう。折角よく仕立てられた装束に紙燭の火をさしつけて焼きこがしたりするそそっかしさは、方弘の笑われる種である。その表現が連用止めになっていて、それを「あるは」で受ける形は、やはり訓読語脈の「或は」としか考えられない。『枕草子』の中の用例を検索すると、三巻本には二例、

Osaka Shoin Women's University Repository

能因本には一例。三巻本の中の他の一例は、

昨日は車ひとつにあまた乗りて、二藍の直衣・指貫、あるは狩衣など乱れて、すだれ解きおろし、物狂ほしきまで見えしきんだちの…（見る物は）

と、明らかに接続詞で、上の句の叙述または言い表わしと同列に並ぶ表現になっている。ややこしい説明を試みるならば、不特定の中の一つとして指し表わされるという意味に於いて「或る人」「或る女房」「或る所」などの連体詞として扱われる「或る」と共通の意義素を含んでいる。

「方弘は」段の「あるは」を、「或る人々は」のような意味に取ることは倒底無理であるとすれば、

紙燭さしつけ（て）焼き

これをこと人に着せばやなどいふ

の二項は、同じ方向に並列した二項でなければならないと思う。上の叙述が方弘のそそつかつしい行動であるから、下の叙述の主格も方弘でなければならない。古典全書では「こと人に着せばや」など言うのは人々であるとする解釈に従って「人人」と割注を挿入してあるが、さまざまに考えて見たが、「あるは」でつないだ文型がまるで生きて来ない。「これをこと人に着せばや」など言ったのは、やはり方弘である。奇怪とさえ思われる方弘の放言である。思うに方弘は、人よりも良く仕立てられた装束が嬉しくて、やたらに吹聴し、「これを他の人々にも着せてやりたいものだよ」など言ったりする。それが女房族の笑いを誘うのである。とすると、「などいふに」で句にして文を切る必要はなくなる。

何よりも注意すべき一点は、伝能因本の本文では、

「これをこと人にきかせばや」など、げにぞことばづかひなどのあやしき。

となっている。「紙燭さしつけ（て）焼き」がないから、従って接続詞「あるは」もない。「これをこと人に聞かせばや」は、文脈の上から方弘の詞としないと解釈出来ない。小学館刊日本古典文学全集の校注には、この条について、

不審。三本系の多くの本は「着せばや」。それに従えば、「これを云云」は人々のことばとなる。底本のままとして、仮りに方弘が自慢していることばと解する。下の「げにぞ云云」はこれをうけたものとみる。

と説いてある。大筋はこの校注者松尾聡・永井和子両氏の考えられた通りである。ただ、三巻本系の本文に従っても、その文脈からは「これをこと人に着せばや」は方弘の自慢の放言としか取りようがないこと、上述のごとくである。能因本系も三巻本系もこのくだりは同じ方向を示しているのである。「これをこと人に聞かせばや」ならば、この装束のみごとさを誰彼にも吹聴してやりたいと言うのであろうし、「着せばや」の方でも、これを他の人にも着せて見たいものだと、方弘が手放しでのろけているとしか取りようはない。さてその「きかせばや」「きせばや」が伝流の間に生じた書写の誤りによるものか、初稿と修補との関係によって生じたものか、異文発生の原因は速断しがたい。

Osaka Shoin Women's University Repository

「方弘は」段は、このあとのくだりについてもくわしく考えてみる必要は感じているが、諸家のすぐれた考証や解釈があるので、それに譲ってこの稿では屋上屋を架することをはばかって省かせていただく。

## 二　やや方弘がきたなき物ぞ

「殿上の名対面こそ」段の後半に、源方弘の笑われる話が出ている。古典全書では五四段、古典文学全集では五八段であるから、「方弘は」段よりも前に置かれているが、両者には何らかのつながりがありそうに思われる。

この段にも、伝能因本系と三巻本系とに多少の本文の違いがあり、問題もあるが、ここで特に触れることはしない。ただ、この段の末節、方弘が御厨子所の御膳棚に沓を置いて騒がれた話を書いた一文は、私にはいろんな面から問題を感じさせるものがある。

第一は、伝能因本・三巻本両系の本文の対立である。第二は「方弘がきたなき物ぞ」と表現が投げかけるものである。第三には、源方弘という若者の持つ「物言ひをかしき」男の性格の問題があろう。

第一には、なるべく簡略に触れて置こう。能因本と三巻本とでは、両者を校合して一つの校定本を作るなどということは、勿論不可能である。能因本は能因本でその本来の姿を求めなければならないし、同様に三巻本も三巻本系統の伝本の中でまず本来の姿を求めなければならない。しかしながら、同系本の比較の中では倒底埋まらない欠陥がそれぞれにあることもあるであろう。他系統の伝本との比較が、その欠陥のありかたを示唆してくれる場合も当然存在するであろう。ただ、そちらの方がわかり易いからというので、短絡的に他系統伝本の詞句を取って置き換えることは、『枕草子』の本文のように相互に異なる成立過程を経て成立したいくつかの系統の本文が対立している作品に対しては、十分に用心しなければならない。前に論じた三巻本の「びびし」を、わかりにくいというだけで能因本の「ひとびとし」を採用して置き換えることの可否などの問題も、その一例である。しかもなお能因本と三巻本との両系の本文を比較して見ることで、両者の表現、文脈の基底には共通した方向が認められ、その方向を変えない範囲内で、語彙の選択・変更がなされたらしいということを考えた。

「殿上の名対面こそ」段の最終節を、古典全書（三巻本）と古典文学全集（能因本）とによって並べて引いて見る。

御厨子所の御膳棚に沓おきていひのしらるるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらむ、え知らず」と主殿司、人々などのいひけるを、方弘「やや、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわがる。（古典全書・一三九頁）

御厨子所のおもだな（ママ）といふ物に、沓置きて、はらへののしるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々の言ひけるを、「やや、方弘がきたなき物ぞや」と

発生の原因は速断しがたい。

Osaka Shoin Women's University Repository

りにきても、いとさわかし。（古典文学全集・一四八頁）

三巻本系の方が文字面も整っていて文意もよく通ずる。能因本系では「はらへののしるを」の所が、やはり無理がありそうである。同系では慶安刊本だけが「いひのゝしる」とある（校本枕冊子による）が、それは他系統本による校訂の加わったものかと推察される。しかしながら、それでもなお、「いひのゝしる」を「ハラへのゝしる」に、仮名の字形から写し誤ったのが、能因本系のここの異文の源流となった公算がやはり最も大きい。次にこの章の末尾の

やゝまさひろがきたなきものそやとりにきてもいとさはかし

（校本枕冊子による）

であるが、このままでは、文の流れも悪いし、「いとさわがし」では、方弘の何かにつけて人を笑わせる奇怪な言動を叙した文として落ち着かない。ここも、原形は三巻本系の

やゝまさひろがきたなきものそとてもいとゝさはがる（同）

に近いものであったと考えざるを得ない。伝本の文字面を一応重んずべきであるが、伝写の間にさまざまの誤写・混乱が生ずる可能性は十分計算に入れなければなるまい。

方弘が御厨子所の御膳棚に沓を置いたのは、その無神経さ無頓着さを示す奇行であろう。殿守司は後宮十二司の一つであり、そこに属する女官たちである。御膳棚に置かれた沓を発見してわいわいがやがや言ひ騒いでいるのも、御厨子所に居た女官たちであろう。「いとほしがりて」とある表現から見ると、またしてもあの方弘？と大方の察しはつけた上で、それとなくかばってやろうと、「誰のか知ら」「わからないわ」と言ったのであろう。方弘がそっと始末をすればよいのに、却って大きな声を出して「ややっ、方弘のきたない物でござりまするぞ」などと言って、いよいよ笑いの渦を大きくしたのである。大体の文表現が、この方向を指していることは動かないと思われる。

第二点についてだが、私は一つの仮説を提示してみたいと思う。「やや、方弘がきたなき物ぞ」という方弘の物言いが、女房たちの笑いを爆発させる何物かを投げかけたのではないかと、これは私の直感みたいなものを感じた。「きたなき物」という連語形態に、当時の語彙の中で、或る種の慣用語的性格が生じつつあったかに思われる。方弘はそんな事は知らずに、単純に「汚ない物」という原義通りの表現で、自分の沓をそう表現した。それはそれでよいはずであるが、女房たちには「きたなき物」という連語形態から、別個の連想を誘発された。それが笑いの輪を拡げてしまったのではないか。

『宇津保物語』を読んでいると、下着のことを婉曲に「きたない物」と表現した所があって、それはもはや「きたなき」「物」という語の原義のままの表現でなくて、きたなくなくても、つまりきれいに洗濯されていても、下着、下の袴の類を直接的に言うことを避けて「きたなき物」「きたない物」と表現していることが観察される。『宇津保』であるから、『枕』よりも先行する文献である。方弘発言の場合、方弘がどんなつもりで言ったかは女房たちにわからなかったわけではない。しかし、何もわざわざ「方弘がきたなき物類を異にする。厚顔無恥な放言をするが、至って罪のない、人を傷

Osaka Shoin Women's University Repository

「いとほしがりて」とある表現から見ると、またしてもあの方弘？

かったわけではない。しかし、何もわざわざ「方弘がきたなき物ぞ」など言わなくても、ことばずくなに「やや、方弘がぞ」とだけでよそうなものである。方弘のいささか持って廻った表現が、本人としては婉曲に言ったつもりかも知れないが、女房たちには、いかにも奇妙な、滑稽なものに響いたのではない。これが私の早くから考えて来た仮説である。

この「きたなきもの」「きたないもの」という連語形態の意味論的な考証については、次項で述べることにして、第三の「物言ひをかしき男」としての方弘について、簡略に言及して置きたい。

『今昔物語集』巻二十八には、笑話を多く集めているが、その中には物言いの奇怪さで人を笑わせる話が特に目に立つ。第六・第七・第八・第九・第十・第十一・第十三・第十四・第十五・第十六・第二十などには、「物をかしく言ふ」「物言ひをかし」「極めたる物言ひ」「物言ひの徳」「をかしく言ふ」などの評語が集中的に見える。

此ノ元輔ハ馴者ノ、物可咲ク云テ、人咲ハスル翁ニテ有ケレバ、此モ面无ク云フ也ケリトナム、語リ伝ヘタルトヤ。（第二八）

『今昔物語集』の「物言ひ」には、共通してこの「面なさ」（厚顔無礼）があり、それが面白くて滑稽で、人を笑わせる所があったのである。自分の物言いが人を食った厚かましさがあることも、それが人々の笑いを爆発させるものであることも、すくなくとも自覚はしていたと思われる。笑わせるつもりで言っていると思われる例はあまりなかったので、笑わせるために話をする落語家や万歳師とは類を異にする。厚顔無恥な放言をするが、至って罪のない、人を傷つける所のない、常に笑いを振り蒔くものであった。人々はそれを期待こそすれ、嫌悪感を抱くことはなかったにちがいない。『今昔物語集』の「物言ひ」は、そのような特殊な意味を持っている。弁舌の達者な人物の意ではない。さらに注意を払って置きたい点は、根っからの愚鈍では、「物言ひをかしき者」と言ひはやされることはなかったろうということである。

『枕草子』に登場する「いみじう人に笑はるる者」としての源方弘は、この「物言ひをかしき者」の類であったと、私は思う。彼は文章生出身で、長徳二年に蔵人に任ぜられた時に二十二歳であったというから、一応才のある男である。長徳三年には修理亮となり、同四年には五位に叙せられているとすれば、人にぬきんでた所もある。中宮定子のサロンの女房たちの眼に触れやすかった時期はおそらく彼が六位の蔵人であった二十二か三の頃であろう。その若さが女房たちの口さがない品定めの対象となりやすかったと想像してもよろしいかと思うし、多分物馴れないであろう六位の蔵人の方弘が、女房たちの中にまじっても物おじもせず、傍若無人にふるまい、文章生あがりの学生っぽい物言いをするのが、面白かったのではないかと思う。

笹の葉が動いてもおかしいという若い女性たちである。相手が理解していようがいまいがおかまいなしに、「一升瓶に二升は入るや」などと、女房たちの耳になじまない俗諺らしいものを引用したり、「かまどに豆やくべたろ」などと、中国の古詩に典拠のありそうな

発言の場合、方弘がどんなつもりで言ったかは女房たちにわからな

Osaka Shoin Women's University Repository

表現をしたり、それを聞く、それが異様な物言いだというだけで、単純に笑ってしまうのが女房たちである。清少納言は、やや客観的立場に立って、

なでふことと知る人はなけれどいみじう笑ふ。

と書いている。清少納言が方弘の言動をおかしく感じているというのとはいささか違う。方弘が笑われる事、それがおかしいのである。笑う女房たちも、彼女の批評の対象となるのである。それはともかくとして、方弘が女房たちをおかしがらせ笑わせたのは、彼の物言いの異様さであったことは認められる。そして、それはみやびの風になじまない、文章生出身を丸出しにした、相手をまるで意識していない物の言い方がもたらしたものであり、『今昔物語』集の清原元輔らの、「物をかしく言ひて人笑はする」それと、同類である。

## 三　連語「きたなき物」の表現性

文字通りにはきたない物はきたない物であって、必ずしも特に狭く限って何物かを意味する表現にはなっていなかったであろう。だが、すくなくとも、あらわにそれと言うのを避けて、婉曲に暗示的に示すのに、「きたなき物」または「きたない物」という表現が用いられることが多かったのは事実である。「方弘がきたなき物ぞ」という表現で、「きたなき物」が履物（沓）をさす慣用語であったという解釈もあるようである。しかし、沓をさして「きたなき物」という慣用があったかという事も問題になる。『大鏡』忠平伝に、「きたなき物」という連語があって、履物を意味するというのが旧説で、これに従った注解が多かったが、この説の出て来たきっかけは『枕草子』「殿上の名対面こそ」段の解釈にあったのではないかと推測される。旧説を提示した学者は、「きたなき物」とは履物を意味する慣用語であったと見たのであろう。しかしながら、『大鏡』の場合は、履物説は場面から考えて無理である。世継の翁が、小一条の南勘解由の小路のあたりで昔忠平公が通られた石だたみをよけて通って泥をつけてしまって「きたなき物」もこんなになったと言って引き出して見せろというくだりである。

今日も参り侍るが、腰のいたく侍りつれば術なくてぞまかり通りつれど、なほ石だたみをばよきてぞまかりつる。南のつらのいと悪しき泥を踏みこみてさぶらひつれば、きたなきものもかくなりて侍るなり」とて、引き出でて見す。

雲林院の堂の中で対坐して語り合っているという場面で、履物を引き出して見せるというのは変である。

このくだりについて、落合直文・小中村義象両氏合著の『大鏡詳解』は履物説であるが、佐藤球氏の『大鏡詳解』には、

旧説、はきもの、履のことといへれどいかが。衣裳を謙遜して汚きものといへるなるべし。

とある。履物説に比すれば無理がないと思われる。だが、この二つの著述のあとでも、履物説は、どちらかといえば大鏡注釈の主流となって来たと見てもよいようである。それには枕草子注釈と相補的に作用していたと思われる。関根正直氏の『枕草子集註』に、

履のこと。大鏡忠平伝中、世継の詞にも履の事を「きたなき物」

ったことが確かめられる。それは、あらわにそれと直指して言うこ

Osaka Shoin Women's University Repository

履のこと。大鏡忠平伝中、世継の詞にも履の事を「きたなき物」といへり。

と注してある。このあたりから、「きたなき物」は履物の意の慣用語であったと見る見解が生じて来たのではあるまいか。

ところで、佐藤球氏『大鏡詳解』の「衣裳を謙遜して汚きものといへるなるべし」説も、まだすっきりしない所があって、説得性に弱さを感じさせる、謙遜した表現だという必然性を感じさせない。保坂弘司氏の『大鏡新考』は、右の佐藤氏の衣裳説を可として、「むさくるしい着物」と注され、

つぎに「引き出でゝ見す」とあるから、雲林院の聴衆の前での動作として、着物の裾などのよごれたのをひっぱって見せる意が穏当であろう。

と説明を加えておられる。だが、おのれの衣裳の粗末さを「きたなき物」という表現につなぐのは、いかがかと思われる。そのような慣用的表現があったとも思われない。

さきの方弘の場合は、足に穿く物を御膳棚に何気なく置いたことを恐縮して、こんなきたない物を置いて申訳ありませんと、あわてて言ったので、慣用的表現とはおそらく無縁であろう。あるいは彼が感違いをして、「きたなき物」というような婉曲表現をすることがみやびな物言いだと思って言ったことが、場面に不調和で、女房たちの笑いに輪をかけたものかも知れない。

『宇津保物語』や『大鏡』『宇治拾遺物語』などに散見する「きたなき物」という連語は、ある種の慣用語として用いられる傾向があったことが確かめられる。それは、あらわにそれと直指して言うことをはばかる場合に、婉曲な表現でそれに代えろという種類のものである。

『宇津保』の「蔵開の上」巻に、女一の宮御産のあと、七日の夜、仲忠が宮の寝所に入るくだり、

中納言（仲忠）入りおはして、宮の鳥の舞見給ふとて御帳の柱をおさへて立ち給ひつるを、「あな見苦し。なぞの破れ子持ちか物は見る」とて、引き据ゑたてまつりて、「日ごろは、きたない物をだに引き解かざりつる、今だに」とて一所に臥し給ひぬ。

という描写がある。「きたない物」は文字通りの汚い物の意ではなく、下着、下袴の類であることは明らかである。和歌的表現ならば「下紐解かで日ごろ経にける」とでも言う所、対話ではそれもはばかられて、右のような婉曲表現になったのである。

同じく「蔵開の中」の巻

「まことや、きたなき物は、たまはり侍りぬ。いぬはいかが。きこえたりしやうにや」

という、仲忠から女一の宮へのふみの詞がある。女一の宮から「昨日の装束ども見苦しかったから」と言って、別の衣裳を送ってよこした、その手紙に、「これももと着しにぞあなる」（これも昔着馴れたものでしょう）とあったのを承けて、それを「きたなき物」と書いたのである。自分が肌身につけて着馴れた着物の意でなければ、宮が昨日のはみっともないからと着替えにと送ってよこしたも

Osaka Shoin Women's University Repository

という解釈もあるようである。しかし、省をさして「きたなき物」という慣用があったかという事も問題になる。『大鏡』忠平伝に、

履のこと。大鏡忠平伝中、世継の詞にも履の事を「きたなき物」といへり。

と注してある。このあたりから、「きたなき物」は履物の意の慣用語であったと見る見解が生じて来たのではあるまいか。

ところで、佐藤球氏『大鏡詳解』の「衣裳を謙遜して汚きものといへるなるべし」説も、まだすっきりしない所があって、説得性に弱さを感じさせる、謙遜した表現だという必然性を感じさせない。保坂弘司氏の『大鏡新考』は、右の佐藤氏の衣裳説を可として、「むさくるしい着物」と注され、

つぎに「引き出でゝ見す」とあるから、雲林院の聴衆の前での動作として、着物の裾などのよごれたのをひっぱって見せる意が穏当であろう。

と説明を加えておられる。だが、おのれの衣裳の粗末さを「きたなき物」という表現につなぐのは、いかがかと思われる。そのような慣用的表現があったとも思われない。

さきの方弘の場合は、足に穿く物を御膳棚に何気なく置いたことを恐縮して、こんなきたない物を置いて申訳ありませんと、あわてて言ったので、慣用的表現とはおそらく無縁であろう。あるいは彼が感違いをして、「きたなき物」というような婉曲表現をすることがみやびな物言いだと思って言ったことが、場面に不調和で、女房たちの笑いに輪をかけたものかも知れない。

『宇津保物語』や『大鏡』『宇治拾遺物語』などに散見する「きたなき物」という連語は、ある種の慣用語として用いられる傾向があったことが確かめられる。それは、あらわにそれと直指して言うことをはばかる場合に、婉曲な表現でそれに代えろという種類のものである。

『宇津保』の「蔵開の上」巻に、女一の宮御産のあと、七日の夜、仲忠が宮の寝所に入るくだり、

中納言（仲忠）入りおはして、宮の鳥の舞見給ふとて御帳の柱をおさへて立ち給ひつるを、「あな見苦し。なぞの破れ子持ちか物は見る」とて、引き据ゑたてまつりて、「日ごろは、きたない物をだに引き解かざりつる、今だに」とて一所（ひとところ）に臥し給ひぬ。

という描写がある。「きたない物」は文字通りの汚い物の意ではなく、下着、下袴の類であることは明らかである。和歌的表現ならば「下紐解かで日ごろ経にける」とでも言う所、対話ではそれもはばかられて、右のような婉曲表現になったのである。

同じく「蔵開の中」の巻

「まことや、きたなき物は、たまはり侍りぬ。いぬはいかが。きこえたりしやうにや」

という、仲忠から女一の宮へのふみの詞がある。女一の宮から「昨日の装束ども見苦しかったから」と言って、別の衣裳を送ってよこした、その手紙に、「これももと着しにぞあなる」（これも昔着馴れたものでしょう）とあったのを承けて、それを「きたなき物」と書いたのである。自分が肌身につけて着馴れた着物の意でなければ、宮が昨日のはみっともないからと着替えにと送ってよこしたも

Osaka Shoin Women's University Repository

のを「きたなき物」は、まさか言えまい。（女一の宮のふみの詞「これももときしにぞ」は古典全書・古典文学大系は「これもことさらにぞ」とあるが文意が取りにくい。前田家本等に従いたい。）

同じく「国譲の中」の巻、女二の宮の乳母が宰相中将祐澄から贈られた女装束類を人に見られては困ると思って、里からの便りだとごまかす所がある。

「里より、洗ひにやりたりし物、きたない物、ひきいれて持て来たり」とて、隠して云云。

この「洗ひにやりたり物」と「きたない物」とは並べてあるから、「きたない物」は特に人に見られては困る物、即ち下着・下の袴の類を指す婉曲表現であろう。

『宇津保』の右にあげた三例から推して考えると、「きたなき物」はその時代に下着・下袴の類を指して言う慣用語となりつつあったと思われる。

勿論の事だが、「きたなき物」が連語として、単語相当の形態となった場合に限る。次のような例は、区別して扱わなければならない。

かかるなからひを、昔より、よくきたなきものに人のいへば、あぢきなくてなむ、えものせぬ。（忠こそ）

「かかるなからひ」は継母子の仲、「きたなきもの」は腹ぎたないもの、みにくいものの意である。形容詞「きたなし」の本来の意味領域に従って解釈しなければならない。

さきに触れた『大鏡』忠平伝の例は、これは『宇津保』の三つの用例に近い。これも、平生人に見せない、見られることをはばかる物として、単なる衣裳の意でなくて、下の袴を指していると見るべきであろう。

『宇治拾遺物語』巻十二の第七話に、

「増賀をしもあながちに召すは何事ぞ。心得られ候はず。もしきたなき物を大なりと聞し召したらか云云」

という、増賀上人の奇行を語ったものがある。意味は明らかで、説明を待たないが、その物の名をあらわに口にすることをはばかるという点、それが発話者自身の持物である点、『宇津保』や『大鏡』に見えた例と共通している。

これらを総合して考えると、「きたなき物」「きたない物」の指す所の意味の範囲は、必ずしも固定していない。だが意味の方向は共通している。その具体的な表現内容は、文脈にあずけていると見れば、理解出来るのではないかと思う。

## 四　婉曲表現のさまざま

『源氏物語』の「桐壺」の巻に、更衣に対するライバルの御方々のいやがらせの甚だしさを描いて、

まうのぼり給ふにも、あまりうちしきるをりをりは、打ち橋・渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人のきぬのすそ堪へがたく、まさなき事もあり。

とあるのは、周知の文章である。この中の「あやしきわざ」とは具

Osaka Shoin Women's University Repository

領域に従って解釈しなければならない

さきに触れた『大鏡』忠平伝の例は、これは『宇津保』の三つの

とあるのは、周知の文章である。この中の「あやしきわざ」とは具

体的に何か、語るに忍びないようなひどい妨害工作を施したのであろう。「衣の裾堪へがたく」とあるから、あるいは汚い物をまき散らしたものかと想像はされるが、それとあらわに表現してないから、『花鳥余情』に、

ここかしこの道に不浄をまきちらし侍る事をいへり。

とあるのも、一つの解釈ではあるが、そこまで想像をたくましくするのもいかがかとも私などには思われる。裳裾を引きかけやすいようなさまざまな障害を設けた程度と考えても一向に差支えはあるまい。

これなどは、事をあからさまに描写すれば情趣感を甚だしくそこなうので、ぼかして匂わせるにとどめる。大体の方向は前項に考えた「きたなき物」という表現と同じである。ただ「きたなき物」はおのれに属する恥ずべき部分を隠すという羞恥を含んでいる点が、やや特殊である。

『宇津保』の「国譲の中」の巻、仲忠が女二の宮の御方をかいま見る場面の描写、

二の宮は、御几帳のかたびらは御たちうちかけてまだおろさず、いささかなることをせむとおぼして入り給へるを、いとよく見たてまつり給ふ。

とある、「いささかなること」は、小用（小便）の意の婉曲な表現であること、まず疑う余地もあるまいと思う。小便の意であれば、『和名抄』には「尿」の和名を「由波利」としているが、仮名の物語や日記の類には全くこの名が出ない。やはり筆にすることを憚ったものであろう。ただ嬰児の尿に漏れて喜んでいる父親の愛を描く場合に限って、次のような表現が見られるが、そこではきたないという感じが全く消されて、ほほえましい情感を出すのに成功している。

宮の御消息にてみちのくに紙に女御書き給ふ、「（上略）これはいぬのしとに濡れ給ひぬめるを脱ぎ換へ給へとて」などあり。

（宇津保・蔵開の上）

仲忠への女一の宮から手紙という立て前で母女御の代筆であるが、いかにも母女御らしい筆つきである。「いぬ」は女一の宮が産んだ赤ちゃんの幼名。そのおしっこに濡れていやがっていない仲忠の若い父親ぶりをほめている書きぶりである。赤んぼのおしっこだけがすこしもきたなく感じないから不思議である。

『紫式部日記』にも「しと」という語が出て来るが、これも親王の祖父となった道長の満悦のさまを描いている場面である。

ある時は、わりなきわざしかけたてまつり給へるを、御紐ときて御几帳のうしろにてあぶらせ給ふ。「あはれ、この宮の御しとにぬるるは嬉しきわざかな。このぬれたるあぶるこそ、思ふやうなるここちすれ」と、よろこばせ給ふ。

日記の地の文には「わりなきわざ」と表現している。あらわな表現は避けているわけである。「御しとに濡るる」は道長のことばであるが、やはり場面を考えた柔軟な表現になっている。「しと」は『和名抄』という所の「ゆばり」に並べて考えれば、女性語的位相の語であろう。今日の「小便」と「おしっこ」との対応と似てい

Osaka Shoin Women's University Repository

る。

右の『紫式部日記』の文例について、語義と表現とのかかわりかたを考えてみると、「わりなきわざ」という連語の意味は、それ自体としては語義本来の「わりなきわざ」でしかない。それが「ゆばり」（小便）の意味を、慣用語としても含んでいたとは思われない。その「わりなきわざ」という連語を、「わりなきわざしかけたてまつる」という文表現となした時に、「わりなきわざ」の具体的な意味内容が「ゆばり」であることを知らしめるのである。その点はさきの「きたなき物」の場合も同様であると考えてよいかと思う。つまり、「きたなき物」が、この連語形態自体の中に、「沓」であるとか、「下袴」であるとかいうような、具体的意味内容を定着させていたわけではない。これに具体的意味内容を与えるのは、文脈であり、その文脈が表現する場面である。ただ「きたなき物」の場合は、見られる限りの表現例から帰納することが出来る、ある種の慣用的領域が生じていたわけである。他人に見せるべきでない、見られることは恥ずかしい、広い意味でのおのれの中の恥部である。事実としてよどれている不潔なる物という意味は、この慣用的用法の中ではむしろ排除されていると見て差支えないのである。

さて、さきの「わりなきわざ」（放尿）に並べられた「しと」であるが、これは「ゆばり」という露骨な語感を避けて、女性語（女性の対幼児擬態語）として語彙の一角を占めるに至ったもので、やがて男性も対女性語・対幼児語として用いることになり、後には「ゆばり」「いばり」を俗語として位置づけて、「しと」が雅語意識を伴なって用いられることにもなる。さきにも触れたように、位相論の対象になる。

『落窪物語』には「くそ」（糞）という語を遠慮会釈もなく物語描写の中に登場せしめている。

「かく立てるは何ぞ。ゐ待れ」とて、かさをほうほうと打てば、くそのいと多かる上に居ぬ。（巻一）

ただし、これは、深刻な物語をやわらげるために喜劇的な笑いを導入しようとしたもので、あながち男性作家の下地が思わず露出したというものではなかった。『落窪』の娯楽性通俗性の一端を示す、意識的な技巧である。ただ上流の姫君たちの読み物としてはあまり好まれなかった。『宇津保物語』には「糞」にかかわるような露骨な描写は全く見られない。『万葉集』の、

からたちのうばら刈りそけ倉たてむくそ遠くまれ櫛造る刀自（巻十六・三八三二）

のような、古代的な素朴なわらいは、平安文学から次第に遠のいて行ったことは確かである。

## 五　「白き物」から「おしろい」まで

平安時代の物語に見える「しろき物」という連語形態は、「しろき」の上に修飾語的なものが付いていない限りは、大体、後世の「おしろい」に相当する化粧料の名である。用心深い言い方をしたが、それ程単純でない語彙論的な問題が介在しているからにほかな

Osaka Shoin Women's University Repository

た、異種、変種の意味で、「ゆばり」「いばり」を俗語として位置づけて、「しと」が雅語意識が、それ程単純でない語彙論的な問題が介在しているからにほかな

らない。

『宇津保物語』『枕草子』等に「白き物」「白い物」という物の名が見えている。それに『栄花物語』には「はふに」という名詞が出てくる。「白き物」と「はふに」と、物は同じで名が異なるのか、両者の指す所の物に何らかの区別があるのか、ということがまず疑問となる。

沈の破子十箇、入れたる物、飯にはしろい物飾ひて入れ、敷物・袋などめでたうして奉れ給へり。（宇津保・あて宮）

これは作り物である。破子に入っているのは飯ではない。飯のようなかっこうに、化粧用のおしろいを入れてあるのである。

白き絹を、縫ひ目はなくて、続飯などして、御衣のやりにして一折櫃、白き物を入れたり。（宇津保・蔵開の上）

すっきりしない表現だが、「白き物」が化粧の料のおしろいであることは動かない。一つの折櫃にいっぱい、白絹を縫わずにそくいで付けて衣裳のように仕立て、その中におしろいが入れてあるという意味であるらしい。贈り物の趣向であって、「あて宮」の巻の例と同じである。白絹は縫うてないからどんなにでも裁縫して使えるし、ここではおしろいを包むに役立てたものと思われる。

うちにて見るは、いとせばき程にて、舎人の顔のきぬもあらはれ、まことに黒きに、しろきものいきつかぬところは、雪のむらむら消え残りたるここちしてみぐるしく、（枕・正月一日は）

三巻本に依った。能因本も多少の出入はあるが、文意を左右するようなちがいはない。ここの「しろきもの」もおしろいの意である。

これと比較されるのは、『栄花物語』「御裳着」の巻に見られる「はふに」という語である。道長が中宮彰子に御厩の秣の田植を見せようとする催しのさま、

あやしの女に黒搔練着せて、はふにといふ物むらはけげさうして、それもかささせてあしだはかせたり。（栄花・御裳着）

「はふに」は「白粉」の字音から来たものであるから、後世の言語で言えば、「おしろい」の中に包含される。だが、「はふにといふ物」と書いているから、女房たちのいう所の「しろいもの」とは、区別があったのであろう。同じ『栄花物語』の中で、この「はふに」と「しろい物」とがふたつとも用いられていて、「はふに」はやや特殊なものとしての扱いを受けているのは、無視しがたい事実である。

御前に扇多くさぶらふ中に、蓬萊作りたるを箱の蓋にひろげて、日かげをめぐりてまろびおきて、その中に螺鈿したる櫛どもを入れて、白い物など、さべいさまに入れなして云云（初花）

女房の中には、大いなる檜破子をして、白い物・薫物などをぞ入れていだし給へりける。（つぼみ花）

この「白い物」は化粧料としてのおしろいである。「御裳着」の巻の「はふに」は、これもおしろいの類であるが、「はふにといふ物」と書いているのは、それが宮廷で広く用いられていたおしろいとは、どこか区別される、親しみのないおしろいであったということは、まず動かせない事実であったろう。

Osaka Shoin Women's University Repository

当然顧みられるのは、『和名抄』十巻本の巻六、容飾具八十八の、「粉」と「白粉」との対立である。

粉　之路岐毛能

白粉　俗云波布遍

ここでも「シロキモノ」と「ハフニ」は何らかの差異があったと考えるべきである。おそらく製法とか原料とかに区別があったのであろうが、断定的にはわからない。『箋注倭名類聚抄』（狩谷棭斎）では、詳細な考証を試みているが、いま一つはっきりしない点もある。『説文』の「粉、所以傅面者也」を引き、徐鍇の注に「古傳面亦用米粉」とあることに觸れ、『急就篇』の注に「粉、謂鉛粉及米粉」とあるのを引いて、上古のおしろいの原料を推測しようとしているが、後世のおしろいは鉛粉であるが、源順の挙げる所の「粉」がそもそも上古の米粉なのか、後世と同じ鉛粉なのか、未だその詳を得ないと注している。「白粉」についても、『栄花物語』のいう所の「はふに」は賤女が顔につけたもので、上等の品でないが、「之呂岐毛能」と「波布遍」との同異はまだよくわからないと述べている。

これ以上のことは、おそらくわれわれにもわかりそうにない。『日本国語大辞典』には、「はふに」について、「米の粉で作ったおしろい」と釈義し、『延喜式』の「造供御白料料、糯米一石五斗、粟一石」を引いて証としているが、『箋注倭名抄』にもこの『延喜式』の文を引いて、他の諸抄『説文』の徐鍇の注等と併せて、「然則西土皇国、古皆傳面以米粉、可知也」と論じている点も首肯すべき点があるので、米粉を用いて製したというのが「白粉」即ち「ハフニ」だけにかけてよいのか、疑問である。「延喜式」の文に見える「白粉」が、『和名抄』に「粉」「白粉」と並べたそれと全く同じであるか、そのあたりがよくわからない。「白粉」という字面が、時には白色の化粧料の義に総称して用い、時には「粉」と区別して特称として用いることも可能であったかも知れない。『箋注倭名類聚抄』に、「波布遍」は胡粉であろうかという説を出し、

按陶弘景注本草粉錫云、即今化鉛所作胡粉也。輔仁訓為波布遍。則知波布遍即胡粉。釈名、胡粉、胡粉也、脂和以塗也者是也。

と考えているのは、『栄花物語』に「はふにという物」とあるのを解釈するのに、当たっていそうな気がする、胡粉、即粉錫ならば、宮廷における化粧の料としてはもはや使わなくなっていたものかも知れない。だからそれを黒い顔に塗りたくった姿が異様な印象を与えたのであったかも知れない。「白い物」と呼ばれた化粧料と、「はふに」とは、やはり別の物であったのであろう。

後世の「おしろい」は「粉」即ち「シロイモノ」の系統であり、次第に鉛白を主材料とするようになった。その「シロイモノ」が、「おしろい」と呼ばれるようになったのは、室町時代のことだと思われる。『文明本節用集』に、

白粉　ヲシロイ　或作白物

とあり、『日葡辞書』に、

Voxiroi

Osaka Shoin Women's University Repository

とあるなどが証となる。

『七十一番職人歌合』には、「しろいものうり」とあるから、交替期には両方が並んで用いられたのであろう。

「おしろい」はその語構成から見て、いわゆる女房ことばであることが知られる。

## 六　結語

この稿で対象とした「きたなき物」「白き物」は、平安期においては、形態としてはまだ単語化していたとは見なせない、形容詞の連体形に「物」という形式名詞を連結させたもので、この形態を本来の意味に用いることも可能であったはずである。それが間接的にある事物をさす表現に用いられて、慣用化していたという点では、両者共通していた。特に後者「白き物」「白い物」が白色の化粧料を表わす名として固定する傾向が強くて、やがて中世以後、女房詞としての「おしろい」を生じて、一般化して今日に至った。前者の「きたなき物」の方は、表現対象も「白い物」ほどに局限されず、慣用の固定化もそれ程強くならないで、平安時代における特殊表現としてとどまったようである。

（昭和54・6・23）

（本学教授・学長）

「然則西土皇国、古皆傅ヘ面以ニ米粉一、可レ知也」と論じている点も

Voxiroi